

2023年度 入試結果速報

2023年度入試では少子化により大学志願者数は減少、一方で私立大を中心とした入学定員増により大学の入口はさらに広がった。受験生にとって追い風の受験環境で、現役生中心の入試という近年の特徴も強まった。

難関大や都市部の大学では志願者数を保つものの、地方では国公立大も競争緩和が目立つようになってきた。学部系統では難関資格に関連する系統が人気の一方、「文・人文」「生活科学」といった系統では志願者数が大きく減少した。

3年目を迎えた大学入学共通テストでは、平均点はアップしたものの、理科②で得点調整を実施するなど、依然難易度が安定していない。加えて独特の出題傾向が私立大専願者の「共通テスト離れ」を引き起こしている。

以下、今春の共通テストの概況と3月10日時点で判明している志願状況をレポートする。

2023年度入試の概観

→ 大学入試の環境

- 少子化と定員増が受験生の「追い風」に
- 共通テストは平均点アップも難易度安定せず

→ 国公立大の状況

- 志願者数は微減が続く
- 地方では競争緩和進む

→ 私立大の状況

- 主要大の志願者数は前年並みを保つ一方、それ以外の大学では減少が顕著

Part 1 大学入学共通テスト概況

志願者数・受験者数ともに減少

2023年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は1月14・15日の2日間にわたり、全国679会場で実施された。

今年度の志願者数は512,581人（前年比97%）、受験者数は474,051人（同97%）となった＜図表1＞。今春の高校卒業者は前年から3%ほど減少した見込みで、共通テスト志願者数・受験者数の減少はこれにともなうものである。現卒別の志願者数では、現役生が前年比97%、既卒生等が同93%と減少した。現役生占有率は過去最高の85%となり、現役生中心の入試になっている様子がわかる。

図表1 センター試験・共通テスト 志願者・受験者数推移

年度	志願者数 (前年比)	受験者数 (前年比)	受験率
2014	560,672 (98%)	532,350 (98%)	95%
2015	559,132 (100%)	530,537 (100%)	95%
2016	563,768 (101%)	536,828 (101%)	95%
2017	575,967 (102%)	547,892 (102%)	95%
2018	582,671 (101%)	554,212 (101%)	95%
2019	576,830 (99%)	546,198 (99%)	95%
2020	557,699 (97%)	527,072 (96%)	95%
2021	535,245 (96%)	484,114 (92%)	90%
2022	530,367 (99%)	488,384 (101%)	92%
2023	512,581 (97%)	474,051 (97%)	92%

※大学入試センター資料より

※受験率は受験者数／志願者数

今年の追試験の受験許可者数は3,893人と昨年の2倍以上となった。このうち新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）罹患者・濃厚接触者が事由となった者は2千人を超えていた。また、＜図表1＞の受験率（受験者数／志願者数）も2021年度以降は90～92%で、それ以前と比較してやや低く推移している。今年も新型コロナの影響が依然として小さくなかったといえる。追・再試験は本試験の2週間後の1月28・29日に実施され、前身の大学入試センター試験時（以下、センター試験）を通じて過去最高の3,471人が受験した。

3科目以下受験者の減少目立つ 私立大専願者の共通テスト離れが要因

＜図表2＞は受験科目数別の受験者数の推移である。主に国公立大志望者が受験する7科目以上は前年比99%と前年並みの受験者数を維持した。一方、4～6科目と、私立大専願の志望者が中心となる3科目以下の受験者数は前年比95%といずれも減少率は高い。共通テストはセンター試験と比較して、理解の質や知識の活用力が求められる出題傾向が強くなっている。そのため、これまで以上に特別な対策が必要で、私立大専願者にとっては個別試験の対策一本に絞った方が効率的にみえる。これが私立大専願者の共通テスト離れにつながっているものとみる。

図表2 共通テスト 受験科目数別の受験者数

受験科目数	受験者数		前年差 (23-22)	前年比 (23/22)
	22年度	23年度		
7科目以上	280,024	276,075	-3,949	99%
4～6科目	88,910	84,594	-4,316	95%
3科目以下	119,449	113,382	-6,067	95%
合計	488,383	474,051	-14,332	97%

※大学入試センター資料より

※理科の基礎を付した科目は2科目で1科目とする

問題分量はさらに増加

3年目の実施となった今春の共通テストだが、「複数資料の提示」「日常や学習場面での問題解決を意識した題材」といった共通テストの特徴は、各科目の出題に反映されていた。

日常の事象の例では、「数学Ⅰ・数学A」でバスケットボールのシュートを題材にボールの放物運動について考察する問題が出題された。このほかにも政治・経済の「少年法改正」「SDGs（持続可能な開発目標）」といった時事的な話題をテーマとした出題、化学基礎の「しょうゆに含まれる塩化ナトリウム量」など身近な物質を取り上げる出題などが随所にみられた。

一方、かねてより指摘されていた問題分量はさらに増加した。学習場面設定のための会話文の多用や、複数資料を提示することで多くの教科・科目で問題冊子のページ数が増加、とくに「国語」「世界史B」「数学Ⅰ・数学A」「物理」などは前年から4ページ増となった。単なる知識の確認ではなく、教科固有の「思考力・判断力・表現力」をより深く問うというコンセプトのもと、それぞれの出題における作題側の工夫もうかがえ、個々の問題では練られた良質な問題が多い。しかしながら、科目全体の難易度・分量といった面のバランスにも考慮した問題作成をお願いしたい。

「数学」で大幅に平均点アップも 科目間の公平性に課題残す

＜図表3-1＞は大学入試センターが公表した共通テストの主な科目の平均点の一覧である。「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」でそれぞれ約18点上昇した。数学では問題冊子ページ数は増えたものの、問題文は読みやすくなり、計算の負担が軽くなったことから平均点上昇につながった。一方、「英語リーディング」「国語」「世界史B」「倫理、政治・経済」などで平均点はダウンした。なかでも、「物理基礎」「生物」「政治・経済」などの科目ではセンター試験時を通じて過去最低点となった。

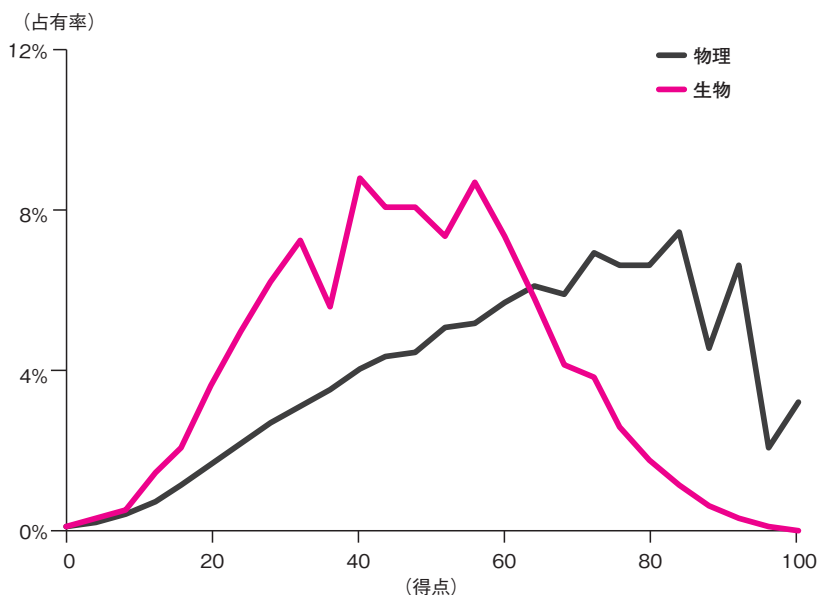
理科では、主に理系生が受験する理科②で得点調整が行われた。最も平均点が高かった「物理」に対し、20点以上の差がついた「生物」との平均点差を調整するため「化学」「生物」で受験生の得点に調整がなされた。＜図表3-2＞は河合塾が実施した自己採点集計「共通テストリサーチ」参加者の物理、生物の得点分布である。得点調整の結果、生物受験者の成績分布は右側に向かって幅広い得点帯に受験者が広がり、なだらかな山になった。しかしながら、高得点層の割合など、物理受験者との差は依然として小さくはない。選択した科目による不公平

図表3-1 共通テスト 主要科目平均点(本試験)

教科・科目名		平均点		
		22年度	23年度	前年差
英語 リーディング		61.80	53.81	-8.0
英語 リスニング		59.45	62.35	+2.9
数学	数学Ⅰ・数学A	37.96	55.65	+17.7
	数学Ⅱ・数学B	43.06	61.48	+18.4
国語		110.26	105.74	-4.5
理科①	物理基礎	30.40	28.19	-2.2
	化学基礎	27.73	29.42	+1.7
	生物基礎	23.90	24.66	+0.8
	地学基礎	35.47	35.03	-0.4
理科②	物理	60.72	63.39	+2.7
	化学	47.63	54.01	+6.4
	生物	48.81	48.46	-0.4
	地学	52.72	49.85	-2.9
地歴	世界史B	65.83	58.43	-7.4
	日本史B	52.81	59.75	+6.9
	地理B	58.99	60.46	+1.5
公民	現代社会	60.84	59.46	-1.4
	倫理	63.29	59.02	-4.3
	政治・経済	56.77	50.96	-5.8
	倫理、政治・経済	69.73	60.59	-9.1

※大学入試センター資料より、数値は得点調整後のもの

図表3-2 共通テスト 得点調整後の物理・生物の得点分布



※河合塾実施の自己採点集計「共通テストリサーチ」より、占有率は得点帯ごとの受験者数の割合

感が拭えたとはいえない状況である。

得点調整は共通テスト移行後、一昨年に続き2度目の実施となった。センター試験では30年で2回のみの実施だったことと比べ頻度が高いことは否めない。多くの受験生に影響を与える共通テストであるからこそ、今後の慎重な作問に期待したい。

総合型平均点アップで高得点層が増加

＜図表4＞は河合塾が推定するセンター試験・共通テストの7科目型平均点の推移である。

今年の平均点は7科目文系型(900点満点)が530点(前年差+23点)、7科目理系型(900点満点)が548点(前年差+38点)と、前年から大きくアップした。ただし、グラフからも読み取れるように、平均点アップといってもこれまでの平均点と比べれば低い。

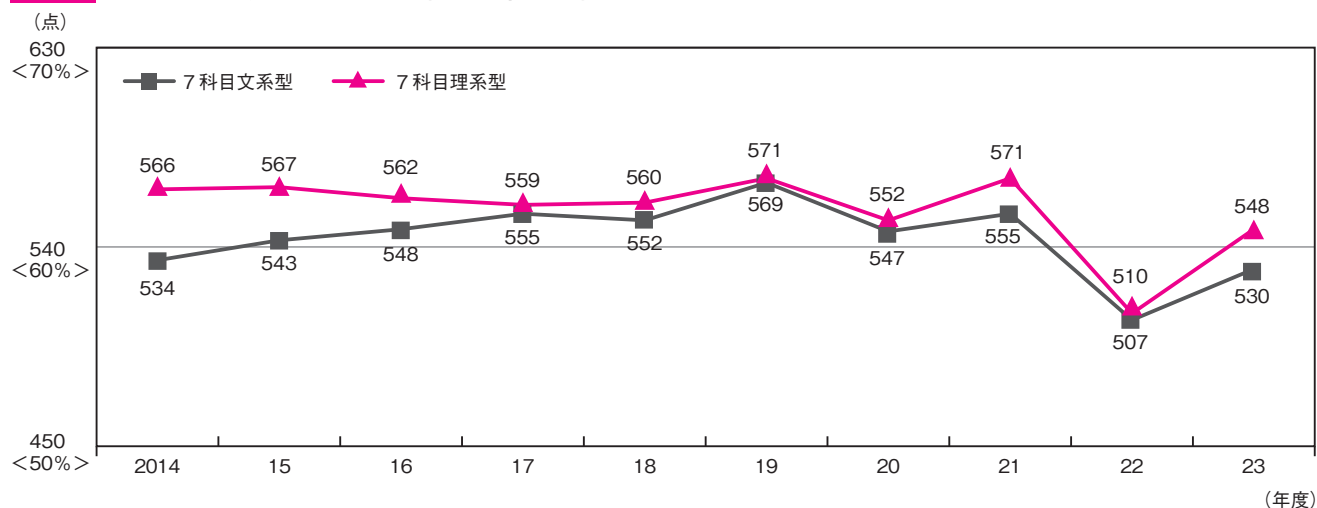
＜図表5＞は「共通テストリサーチ」参加者の得点分布である。多くの国公立大で必要となる7科目の受験者の得点分布は、文系型、理系型ともに右にシフトし得点率8割以上の高得点層が前年から倍増した。

3教科型では、主に私立文系志望者が受験する「英・国・数または地公」の3教科型と、私立理系志望者が受験する「英・数・理」の3教科型の得点分布を示した。「英・国・数または地公」型では、今年の分布が小さく

なっているのが特徴的だ。冒頭で共通テストの3科目受験者が減少したとお伝えしたが、私立文系志望者の共通テスト利用が減っていることをうかがわせる。「英・数・理」型では、数学の平均点アップにより高得点層が厚くなっている。

今春の共通テストは、作問のコンセプトは変わらず安定してきたものの、依然として難易度設定については試行錯誤中であるように見える。次年度以降の動向に注目していきたい。

図表4 センター試験・共通テスト 総合型平均点推移



※総合型平均点は河合塾推定

7科目文系型：英・数(2)・国・理(1)・地公(2) (900点満点)

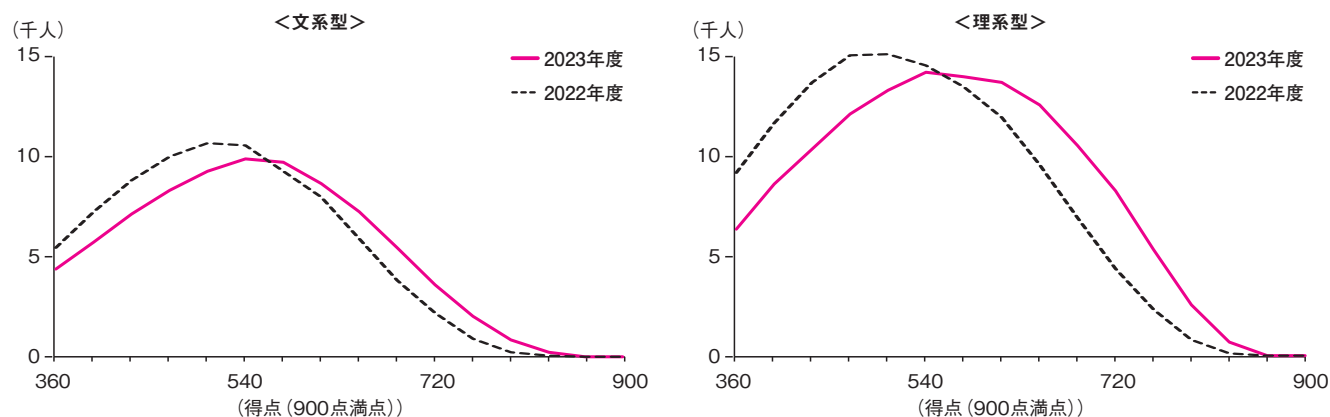
7科目理系型：英・数(2)・国・理(2)・地公(1) (900点満点)

*2020年度まではセンター試験の数値で、英語は筆記+リスニングの250点を200点に換算して集計

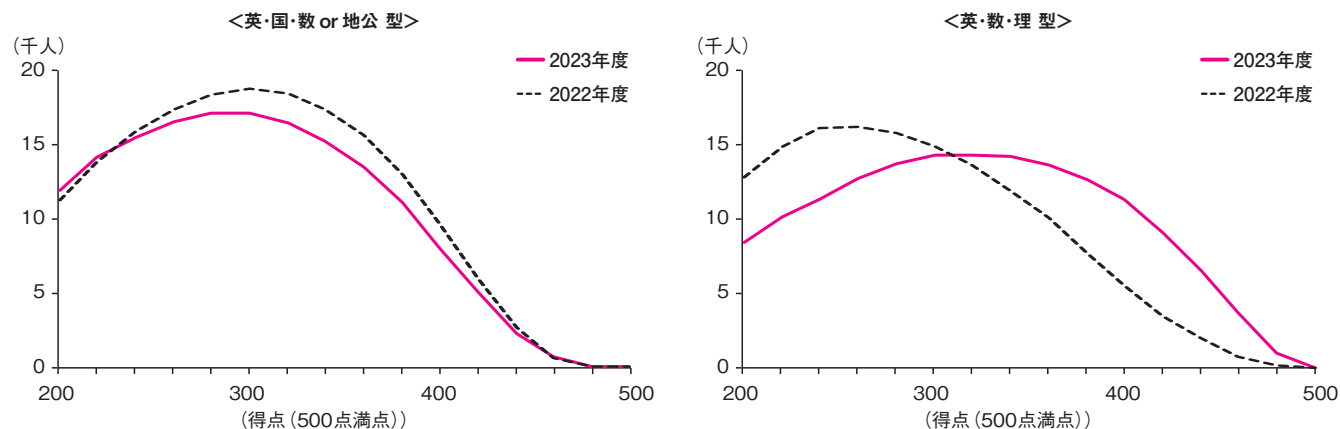
*理科の基礎を付した科目は2科目で1科目とする

図表5 共通テスト 総合型得点分布

7科目 受験者の得点分布



3教科 受験者の得点分布



※河合塾実施の自己採点集計「共通テストリサーチ」より、得点調整を反映させたデータで作成

Part 2 国公立大学の志願状況

国公立大前期日程 志願者数はやや減少

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は、231,430人（前年比99%）となった＜図表6＞。共通テストの受験者数前年比97%と比較すれば減少率は低く抑えられている。国立大、公立大を分けてみると、国立大で前年比98%、公立大で同100%と公立大ではほとんど減少していない。しかし、これは前年公立大学法人化された周南公立大が集計に加わったため、これを除けば国立大同様の98%となる。

後期日程では志願者数は前年比98%、後期日程の廃止・縮小で募集人員も同98%となっているため、倍率に変化はみられない。なお、後期日程で2次試験を実施しない大学のなかに、ここ数年で大幅に志願者が増加した例がみられる。室蘭工業大では共通テストと調査書のみで判定されるが、志願者数は3年連続で増加しており、2020年度の483人から今春は1,434人まで増加した。

公立大で実施される中期日程は前年比101%とわずかではあるが志願者が増加した。ただし、中期日程の募集人員は前年比103%と増加しているため、倍率は0.4ポイントダウンした。

＜図表7＞は過去10年間の志願者数・倍率の推移をみたものである（以降はとくに記載がない場合、文中の志願者数・前年比は前期日程を表す）。以前は26万人前後で推移してきた国公立大の志願者数は、2020年度以降、徐々に減少している様子がみとれる。それにつれて志願倍率もダウンしており、ここ3年は2.9倍で推移している。来春の18歳人口は今春からさらに3万4千人ほど減る見込みで、志願者数はいよいよ23万人

を下回りそうである。

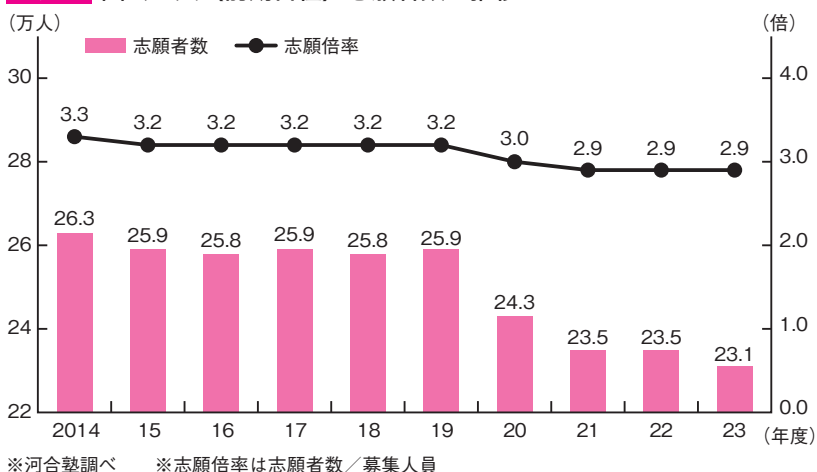
＜図表8＞は地区別の志願状況である。関東、東海、近畿など都市部では昨年より志願者が増加したものの、北海道、東北、北陸、四国、九州などでは減少した。中国地区は昨年の志願者が前年から1割減少していたため、今年は前年比106%と増加した。この中国地区を含め、関東、近畿地区を除く各地区とも一昨年と比べ志願者は減少している。国公立大も地方では志願者減少が進んでいると同時に、志願倍率の地域間差も2021年度の0.8倍から2023年度の1.2倍まで拡大している。

図表6 国公立大志願状況

区分	日程	志願者数					志願倍率		
		21年度	22年度	23年度	前年差 (23-22)	前年比 (23/22)	21年度	22年度	23年度
国立	前期	177,183	179,318	176,464	-2,854	98%	2.8	2.8	2.8
	後期	118,753	123,631	121,821	-1,810	99%	9.0	9.5	9.6
公立	前期	58,226	55,239	54,966	-273	100%	3.6	3.4	3.3
	後期	42,167	39,781	38,246	-1,535	96%	12.1	11.9	11.3
	中期	29,090	31,380	31,663	+283	101%	12.3	13.4	13.0
国公立計	前期	235,409	234,557	231,430	-3,127	99%	2.9	2.9	2.9
	後期	160,920	163,412	160,067	-3,345	98%	9.6	10.0	10.0
	中期	29,090	31,380	31,663	+283	101%	12.3	13.4	13.0

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員
※独自日程で実施する大学は上表には含まれていない

図表7 国公立大（前期日程）志願者数の推移



学部系統別の志願状況 「経済」「農」「医療」で志願者増

＜図表9＞は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。

図表8 国公立大（前期日程）地区別志願状況

地区	志願者数					志願倍率		
	21年度	22年度	23年度	前年差 (23-22)	前年比 (23/22)	21年度	22年度	23年度
北海道	11,552	11,559	11,250	-309	97%	2.8	2.8	2.7
東北	18,381	18,560	17,620	-940	95%	2.8	2.8	2.7
北関東	11,829	11,901	12,321	+420	104%	2.8	2.8	2.9
南関東	46,739	47,676	48,256	+580	101%	3.5	3.5	3.6
甲信越	11,057	10,793	10,545	-248	98%	2.8	2.7	2.6
東海	21,466	20,552	20,993	+441	102%	3.1	2.9	3.0
北陸	10,873	10,903	10,253	-650	94%	2.9	2.8	2.7
近畿	39,520	40,085	40,218	+133	100%	2.8	2.9	2.9
中国	22,143	19,759	21,042	+1,283	106%	2.9	2.6	2.8
四国	10,373	11,607	9,062	-2,545	78%	2.8	3.1	2.4
九州	31,476	31,162	29,870	-1,292	96%	2.7	2.7	2.6

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員

文系では「文・人文」「社会・国際」で減少が目立つ。一方、「法・政治」は前年並み、「経済・経営・商」は志願者が増加した。理系では、「理」で前年並み、「農」で志願者が増加したが、「工」では減少した。医療系では「医」「歯」分野で高い増加率となった半面、「看護」では志願者が減少した。

以下に、主な系統について確認していく。

文・人文学系

系統全体の志願者数は前年比92%と大きく減少した。分野別にみると、「文学」「外国語」などで減少率が高かった。「外国語」では東京外国語大（言語文化）の志願者が前年比81%と大きく減少した。東京外国語大では共通テスト数学が1科目から2科目必須となり、数学の負担増が敬遠要因となった。このほか大阪大（外国語）でも前年比93%と志願者が減少した。

図表9 国公立大（前期日程）学部系統別志願状況

系統	志願者数					志願倍率		
	21年度	22年度	23年度	前年差 (23-22)	前年比 (23/22)	21年度	22年度	23年度
文・人文	20,767	20,680	19,061	-1,619	92%	2.9	2.9	2.7
社会・国際	12,779	12,186	11,315	-871	93%	3.2	3.0	2.8
法・政治	12,219	12,054	11,971	-83	99%	3.0	2.9	2.9
経済・経営・商	25,154	24,384	25,478	+1,094	104%	3.1	3.0	3.1
教育－教員養成課程	17,352	16,695	16,467	-228	99%	2.5	2.4	2.3
教育－総合科学課程	1,905	2,006	2,102	+96	105%	2.3	2.4	2.5
理	14,003	14,098	14,159	+61	100%	2.7	2.8	2.8
工	64,781	64,085	61,341	-2,744	96%	2.9	2.8	2.7
農	14,921	15,893	16,175	+282	102%	2.7	2.9	3.0
医・歯・薬・保健	35,133	35,895	37,006	+1,111	103%	3.3	3.3	3.4
医	14,773	15,087	15,960	+873	106%	4.1	4.2	4.5
歯	1,595	1,576	1,769	+193	112%	3.5	3.5	3.9
薬	2,851	3,120	3,141	+21	101%	3.5	3.8	3.9
看護	10,423	10,647	10,281	-366	97%	2.7	2.7	2.6
医療技術・他	5,491	5,465	5,855	+390	107%	2.9	2.9	3.1
生活科学	2,510	2,410	2,349	-61	97%	3.2	3.0	3.0
芸術・スポーツ科学	6,730	6,848	6,877	+29	100%	4.3	4.4	4.4
総合・環境・情報・人間	7,155	7,323	7,129	-194	97%	3.0	3.2	2.9
国公立 計	235,409	234,557	231,430	-3,127	99%	2.9	2.9	2.9

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員

社会科学系(社会・国際、法・政治、経済・経営・商)

「社会・国際」系も前年比93%と志願者の減少が目立つ。なかでも「国際関係」分野では前年比85%と減少率が高く、倍率も3.0→2.5倍へ大きくダウンした。東京外国語大(国際社会、国際日本)が前年比67%と大きく志願者を減らしたほか、前年に志願者が大きく増加していた宇都宮大(国際)、金沢大(人間社会－国際)、島根県立大(国際関係)などでも志願者が減少した。

「法・政治」系では前年並みの志願者数となった。大学別にみると、東北大、一橋大、神戸大、九州大など難関大の法学部で志願者の減少がみられた。一方、地方の大学では、今春は志願者が増加した大学が目立った。さらに近年極端な隔年現象を起こしているケースがみられ、今春までの3年間の志願者数前年比をみると、福島大(人文社会－行政政策)では110%→50%→263%、静岡大(人文社会－法)では59%→342%→22%で推移している。倍率も1倍台から3～6倍台と変動が大きくなっている。

「経済・経営・商」学系では、前年比104%と志願者が増加した。周南公立大(経済)の志願者数を除いても前年比は102%と、文系の中では人気学系である。増加率が高かったのは横浜国立大(経済)前年比272%、大阪公立大(経済)同160%などである。

教育学系(教員養成課程、総合科学課程)

教育学系全体の志願者数は前年比99%となった。教育学系のうち総合科学課程の志願者数は前年比105%となったが、規模が小さいため教育学系全体には影響しなかった。大学ごとにみると志願者数の変動が大きな大学がみられる。宇都宮大(共同教育)、金沢大(人間社会－学校教育)、鳴門教育大では志願者が前年の6割程度まで減少、倍率も1倍台にダウンした。反対に志願者が大きく増加したのは、宮城教育大、岡山大、広島大などで、いずれも倍率は昨年の1倍台から2倍台に回復した。

教育学系は全系統の中で最も倍率が低く、募集区分単位でみると今春は3分の1が1倍台となっており、競争緩和が進む。

自然科学系(理、工、農)

「理」学系では、「数学・数理情報」「生物」分野など

で志願者が増加した。大学別にみると、筑波大(理工)、東京工業大(理)、静岡大(理)、大阪公立大(理)、九州大(理)、鹿児島大(理)などで志願者が大きく増加した。

「工」学系では前年比96%と志願者が減少した。旧帝大を中心とする難関大9大学では前年比99%と前年並みの志願者数を維持しており、その他の大学で減少(同94%)した。なお、「理」「工」学系では、横浜国立大(理工)の志願者数が前年から2割以上増加した。2022年度も前年から7割以上増加しており、2年連続の大幅増となった。

「農」学系では前年比102%、昨年ほどの増加率ではないものの2年連続の志願者増となった。倍率も「理」「工」学系より高い3.0倍となっている。とくに増加率が高いのは「獣医」分野で、志願者は前年から1割増となった。なかでも鹿児島大(共同獣医)では前年の3倍近い志願者が集まった。

医療系(医・歯・薬・保健)

医療系全体の志願者数は、前年比103%と増加した。今春は難関資格に関連が深い系統・分野の人气が高く、「医」「歯」「薬」で志願者が増加した。

「医」では、3年連続の志願者増となり、倍率は4.5倍に上昇した。「医」の志願者が増えたこともあり、前期日程における第1段階選抜不合格者数は前年の約3千人から約3千6百人に増加した。10倍を超える高倍率となった大学は、福島県立医科大(一般枠)、岐阜大、奈良県立医科大、島根大であった。名古屋大、京都大では、第1段階選抜を基準点で行うため、昨年は志願者が大きく減っていたが、今春はいずれも志願者が増加した。

「薬」では今春もわずかながら志願者が増加、こちらも3年連続の志願者増となった。前年志願者が増加していた金沢大、広島大などで減少した一方、前年は志願者が減少していた東北大、岡山大(薬－薬)などでは増加した。

学際系(総合・環境・情報・人間)

分野別にみると、「総合」分野は前年の志願者増の反動で今春は前年比64%と大きく減少した。金沢大(融合)ではスマート創成科学類が新設されたが、募集人員が少ないこともあり志願者は集まらなかった。徳島大(総合科学)は隔年現象が著しく、直近3年の志願者前年比は41%→313%→26%で推移している。

図表10 国立難関10大学の志願状況

大学名	前期日程					後期日程				
	21年度	22年度	23年度	前年差 (23-22)	前年比 (23/22)	21年度	22年度	23年度	前年差 (23-22)	前年比 (23/22)
北海道	5,104	5,409	5,284	-125	98%	3,517	4,107	4,524	+417	110%
東北	4,499	4,392	4,239	-153	97%	1,251	1,332	1,007	-325	76%
東京	9,089	9,507	9,306	-201	98%	—	—	—	—	—
東京工業	3,638	3,802	4,167	+365	110%	—	—	—	—	—
一橋	2,564	2,588	2,641	+53	102%	1,036	1,244	1,739	+495	140%
名古屋	4,581	4,339	4,258	-81	98%	54	38	76	+38	200%
京都	7,045	7,210	7,417	+207	103%	379	360	410	+50	114%
大阪	6,991	7,501	7,398	-103	99%	—	—	—	—	—
神戸	6,194	6,071	5,885	-186	97%	4,042	4,052	4,020	-32	99%
九州	5,175	5,143	5,067	-76	99%	2,454	2,549	2,218	-331	87%
難関10大学計	54,880	55,962	55,662	-300	99%	12,733	13,682	13,994	+312	102%
その他大学計	180,529	178,595	175,768	-2,827	98%	148,187	149,730	146,073	-3,657	98%

※河合塾調べ ※「その他大学計」は難関10大学を除いた国公立大計

「情報」分野は前年比116%と志願者が集まった。一橋大、名古屋市立大などの学部新設が要因となったほか、名古屋大（情報）、広島大（情報科学）などで志願者が増加した。

難関国立大の志願状況 東京工業大で志願者が1割増

<図表10>は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況を前期日程・後期日程でまとめたものである。

難関10大学全体の前期日程の志願者数は、55,662人（前年比99%）であった。大学別にみると、東京工業大、一橋大、京都大で志願者数が前年を上回った。以下、各大学の状況を個別にみていく。

北海道大学

前期日程の志願者数は前年比98%とやや減少した。学部別にみると志願者は文、経済、総合入試理系、水産学部で減少した。いずれも前年に志願者が増加していた学部である。一方、今春志願者が増加したのは、法、獣医、医、歯学部であった。医学部では医学科で前年比92%と志願者が減少したものの、入学定員減により募集人員も減少しており、倍率は上昇した。

後期日程では、志願者が前年から1割増となった。文、教育、農、薬学部などでは2年連続の志願者増となり、なかでも農学部は2年連続で前年から2割増と大きく志願者を増やした。

東北大学

前期日程の志願者数は前年比97%、2年連続の減少

となった。学部別にみると、文、法、経済、理、工、医学部で志願者が減少した。とくに文学部では前年比82%と減少幅が大きく、2018年度以降、隔年現象を繰り返しながら志願者を徐々に減らしている。志願者が増加した学部は教育、農、歯、薬の4学部で、歯学部は前年まで3年連続で志願者が減少していたこともあり、今春は前年比197%と前年の2倍近い志願者が集まった。後期日程では、経済、理学部ともに志願者が減少した。いずれも志願者は前年から2割以上減少した。

東京大学

大学全体の志願者数は前年比98%となった。文科類では、文科二類で前年並みの志願者となった一方、文科一類・三類では志願者が減少した。とくに文科三類では唯一第1段階選抜が実施されなかった。理科類では、理科一類で志願者減、理科二類で増となった。理科三類は前年並みの志願者数だったが、第1段階選抜の予告倍率が3.5倍から3.0倍に狭まっており、第1段階選抜の合格者数は昨年の340人から291人に大きく減少した。

東京工業大学

大学全体の志願者数は前年比110%と大きく増加、物質理工学院を除く5学院で志願者が増加した。なかでも、理、工学院で志願者は100人以上増加した。東京医科歯科大との統合、次年度からの総合型・学校推薦型選抜での女子枠の導入など、話題にあがることが多かったことも受験生の注目を集めるきっかけとなった。

倍率をみると、情報理工学院が9.9倍と例年通り最も高くなった。次いで理、工、環境・社会理工学院と前年

から序列に変化はなかった。全学院をあわせて募集人員の4倍を上回る志願者数となったため、2段階選抜が実施された。

一橋大学

前期日程の志願者数は前年比102%とやや増加した。新設するソーシャル・データサイエンス学部を除いた既存の学部だけでみると、志願者は前年比95%と減少したものの、募集人員の減少率と同率であり、定員減の影響はみられなかった。ソーシャル・データサイエンス学部には182人の志願者が集まり、倍率は6.1倍と学内で最も高くなった。

後期日程は経済、ソーシャル・データサイエンスの2学部で実施される。経済学部では志願者数は1,095人（前年比88%）と前年から1割以上減少したものの、ソーシャル・データサイエンス学部には644人の志願者が集まった。

名古屋大学

前期日程の志願者数は前年比98%。学部別にみると、経済学部で前年比75%となったのをはじめ、文（同92%）、教育（同93%）など文系で減少率が高い学部が目立った。一方、農、医、情報の3学部では志願者が増加、なかでも医、情報学部はいずれも前年から2割増となった。医学部医学科では前年比167%と、とりわけ増加率が高かった。今春より地域枠は前期日程で募集したが、倍率は一般枠2.7倍、地域枠4.6倍となった。

京都大学

前期日程の志願者数は前年比103%と、前年に続く志願者増となった。学部別にみると、経済、理、医学部では志願者はいずれも前年から1割以上増加した。理学部、医学部医学科は第1段階選抜を基準点で実施しており、昨年の志願者減の反動もあるだろう。反対に志願者が減少したのは、文、教育、法、工、薬学部だが、いずれも減少数は小幅にとどまった。工学部の各学科の倍率をみると、情報学科が4.7倍と最も高く、次いで建築（3.7倍）、物理工（3.3倍）などが続き、例年と変化ない。法学部の後期日程で実施される特色入試には、410人（前年比114%）の志願者が集まった。

大阪大学

大学全体の志願者数は前年比99%となった。学部別にみると、文、法、基礎工、薬学部で志願者が増加した。基礎工学部と工学部は2019年度から交互に志願者が増減する隔年現象を起こしており、今年は基礎工学部で志願者増、工学部で志願者減（前年比93%）となった。

志願者が減少したのは、外国語、理、工、医、歯、人間科学部などである。外国語学部では、一部の専攻で1倍台の低倍率になった。医学部医学科では志願者数は前年から1割減となった。ただし、入学定員減で募集人員も減少したため、倍率に大きな変化はない。歯学部は全国的には人気となったが、大阪大では今春は志願者1割減となった。

神戸大学

前期日程の志願者数は前年比97%、2年連続の減少となった。学部別にみると、文、法、理、農学部などで志願者が減少した。文学部では近年隔年現象を起こしており、直近4年の志願者前年比は121%→70%→158%→67%で推移、今春の倍率は2.2倍となった。理学部では5年ぶりの志願者減となった。生物学科では志願者が増加したものの、他の4学科はいずれも減少した。志願者が増加したのは、経済、経営の2学部のみであった。経済学部では前年比120%と大きく増加した。ただし、志願者が増加したのは「総合選抜」で、「数学選抜」「英数選抜」は減少した。

後期日程の志願者数は前年比99%となった。法、理、海洋政策科学、医学部などで志願者増となった。法学部では前年比124%と志願者が大きく増加した。工学部では前年並みの志願者数であったが、建築、電気電子工学科などで志願者が増加した。電気電子工学科は今春、募集人員が18名→26名に増加しており、3年連続の志願者増につながった。

九州大学

前期日程の志願者数は前年比99%となった。志願者が増加したのは、理、薬学部などである。薬学部では臨床薬学科で志願者が増加、倍率は3.8倍に上昇し、創薬科学科（2.5倍）との差が広がった。志願者が減少したのは、文系4学部、共創、農学部などである。文系4学

部の志願者数は前年比93%と大きく減少した。農学部は前年に志願者が大きく増加していたことが影響した。

後期日程では、前年比87%と志願者が減少した。学部別には農、薬学部で志願者が増加したものの、その他

の学部では減少した。とくに減少率が高いのは経済学部で、経済・経営学科では前年比41%と大きく志願者が減少した。

Part 3 私立大学の志願状況

志願者数は減少

私立大入試については、志願者数を調査した全国194大学の集計（3月10日時点）から検証する。この194大学の2022年度入試の志願者数の合計は私立大全体の志願者数の8割を超えており、今春入試の概観は現段階で十分につかめるものと考ええる。

全国194大学の一般選抜の志願者数は、全体で前年比98%となった<図表11>。これは今春の18歳人口の減

少率（前年比98%）と同率となっており、人口減通りの動向といえる。<図表12>は過去10年間の私立大の志願者数の推移をみたものである。以前は増加を続けていた志願者であるが、新型コロナの影響などから、2021年度入試で大幅に減少した。以降も概ね前年並みで推移しており、2020年度以前の状況には戻らない。

方式別にみると一般方式の志願者数は前年比96%となった一方、共通テスト方式では同100%と前年並みとなった。今春の共通テストの受験者数が前年比97%と

図表11 私立大 大学グループ別志願状況

学校区分		一般方式					共通テスト方式					合計				
		21年度	22年度	23年度	22/21	23/22	21年度	22年度	23年度	22/21	23/22	21年度	22年度	23年度	22/21	23/22
194大学 計		1,840,642	1,865,189	1,798,731	101%	96%	908,225	908,231	907,379	100%	100%	2,748,867	2,773,420	2,706,110	101%	98%
主な内訳	早慶上理	150,381	157,513	151,148	105%	96%	53,530	50,479	54,006	94%	107%	203,911	207,992	205,154	102%	99%
	MARCH	246,709	265,467	253,288	108%	95%	126,672	119,142	122,702	94%	103%	373,381	384,609	375,990	103%	98%
	成成明國武	58,199	63,134	63,052	108%	100%	28,485	30,764	29,186	108%	95%	86,684	93,898	92,238	108%	98%
	日東駒専	179,378	177,372	174,083	99%	98%	84,589	89,019	86,023	105%	97%	263,967	266,391	260,106	101%	98%
	首都圏理系10大学	159,857	164,808	172,185	103%	104%	120,288	141,928	142,951	118%	101%	280,145	306,736	315,136	109%	103%
	首都圏女子12大学	36,854	34,320	31,136	93%	91%	19,436	20,005	19,796	103%	99%	56,290	54,325	50,932	97%	94%
	関関同立	168,733	178,395	182,304	106%	102%	70,641	70,440	77,975	100%	111%	239,374	248,835	260,279	104%	105%
	産近甲龍	173,313	183,520	188,313	106%	103%	69,694	77,113	73,896	111%	96%	243,007	260,633	262,209	107%	101%
	北星学園・北海学園	6,224	6,532	5,701	105%	87%	2,805	3,122	2,601	111%	83%	9,029	9,654	8,302	107%	86%
	東北学院	6,144	8,910	9,116	145%	102%	3,747	4,100	3,611	109%	88%	9,891	13,010	12,727	132%	98%
	南山・愛知・中京・名城	62,266	65,926	62,348	106%	95%	39,864	41,895	40,099	105%	96%	102,130	107,821	102,447	106%	95%
	西南学院・福岡	39,704	40,074	41,422	101%	103%	20,435	20,793	18,591	102%	89%	60,139	60,867	60,013	101%	99%
	上記以外の大学	552,880	519,218	464,635	94%	89%	268,039	239,431	235,942	89%	99%	820,919	758,649	700,577	92%	92%

※数値は3/10現在、河合塾集計（2023年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

※大学グループ

早慶上理：早稲田・慶應義塾・上智・東京理科 MARCH：明治・青山学院・立教・中央・法政

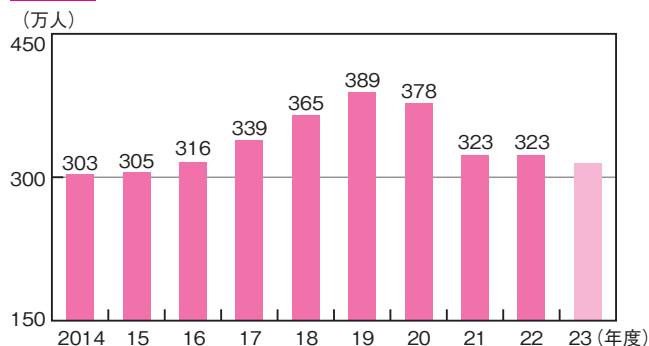
日東駒専：日本・東洋・駒澤・専修 成成明國武：成蹊・成城・明治学院・國學院・武蔵

首都圏理系10大学：千葉工業・北里・工学院・芝浦工業・東京工科・東京電機・東京都市・東京農業・麻布・神奈川工科

首都圏女子12大学：大妻女子・学習院女子・共立女子・白百合女子・実践女子・昭和女子・聖心女子・清泉女子・津田塾・東京女子・東京家政・日本女子

関関同立：関西・関西学院・同志社・立命館 産近甲龍：京都産業・近畿・甲南・龍谷

図表12 私立大 志願者数の推移



※文部科学省資料より

※グラフは私立大一般選抜志願者数の推移(2023年度は河合塾推定)

減少、とりわけ私立大専願者が多く受験する3科目以下の受験者数が同95%となったことを鑑みると、共通テスト方式では堅調に志願者が集まったといえる。今春は主要大で共通テスト方式を中心に複線化の動きが活発で、たとえば上智大が新たに共通テスト方式で3教科型を設置している。こうした動きに連動して、受験生も主要大で出願校数を増やしたものと考えられる。

難関大・有名大は前年並みの志願者数を保つ

大学グループ別に志願状況を見ると、首都圏では「首都圏女子12大学」を除きどのグループも概ね前年並みを維持した。「早慶上理」グループでは共通テスト方式で前年比107%と志願者の増加が目立つが、これは上智大が新方式を導入したことに加え、早稲田大で教育学部が新たに共通テストを利用したこと、人間科学部や政治経済学部などで志願者が増加したことが要因である。「MARCH」グループの志願者数は微減だが、中央大と明治大では志願者が増加した。とくに明治大は2年連続で志願者数が10万人を超えた。「日東駒専」グループでは、日本大と駒澤大で志願者が増加したが、東洋大が志願者減となったことで前年並みとなった。「首都圏理系10大学」グループでは今春も志願者が増加した。近年、共通テスト方式の受験料無償化によって多くの志願者を集めている千葉工業大は今春も志願者が10万人を超えた。「首都圏女子12大学」グループの志願者数は前年比94%と4年連続で減少した。なかでも大妻女子大や東京家政大、東京女子大などで志願者の減少が目立った。近畿圏をみると、「関関同立」グループで前年比105

%と、前年に続き志願者増となった。関西大を除く3大学で志願者が増加しており人気の高さがうかがえる。「産近甲龍」グループでは近畿大の志願者が減少したものの、龍谷大と甲南大で志願者が大きく増加したため、グループ全体では前年並みとなった。なお、近畿大では減少したとはいえ、今春も15万人を超える志願者を集めており、10年連続で一般選抜の志願者数が日本一となった。

各グループが比較的、堅調に志願者を集める一方、「上記以外の大学」では前年比92%と減少が目立った。入試の競争緩和が続くなかで、難関大・有名大以外の出願校数を減らす受験生が増えたものと考えられる。

学部系統別の志願状況 人気続いた「薬」で志願者減少

＜図表13＞は、学部系統別の志願状況である。

私立大全体の志願者数前年比98%を基準にみていくと、「文・人文」の志願者数は同94%と人気がない。分野をみると、「外国語」「地域・国際」といった近年不人気が続く国際系では減少幅は小幅にとどまった。このほか文系では「法・政治」で志願者数が前年比92%と減少率が高くなった。一方、「経済・経営・商」では前年比101%と堅調に志願者を集めた。

理系では「理」「農」の志願者が増加した一方、「工」では前年比98%と増加には至らなかった。分野別にみると、規模の大きい「機械・航空」「通信・情報」が減少した一方、「材料・物質・資源」「生物工・生命工」では増加した。私大工学部のトレンドが「ものづくり・技術」からより多様な分野へ広がりを見せている。

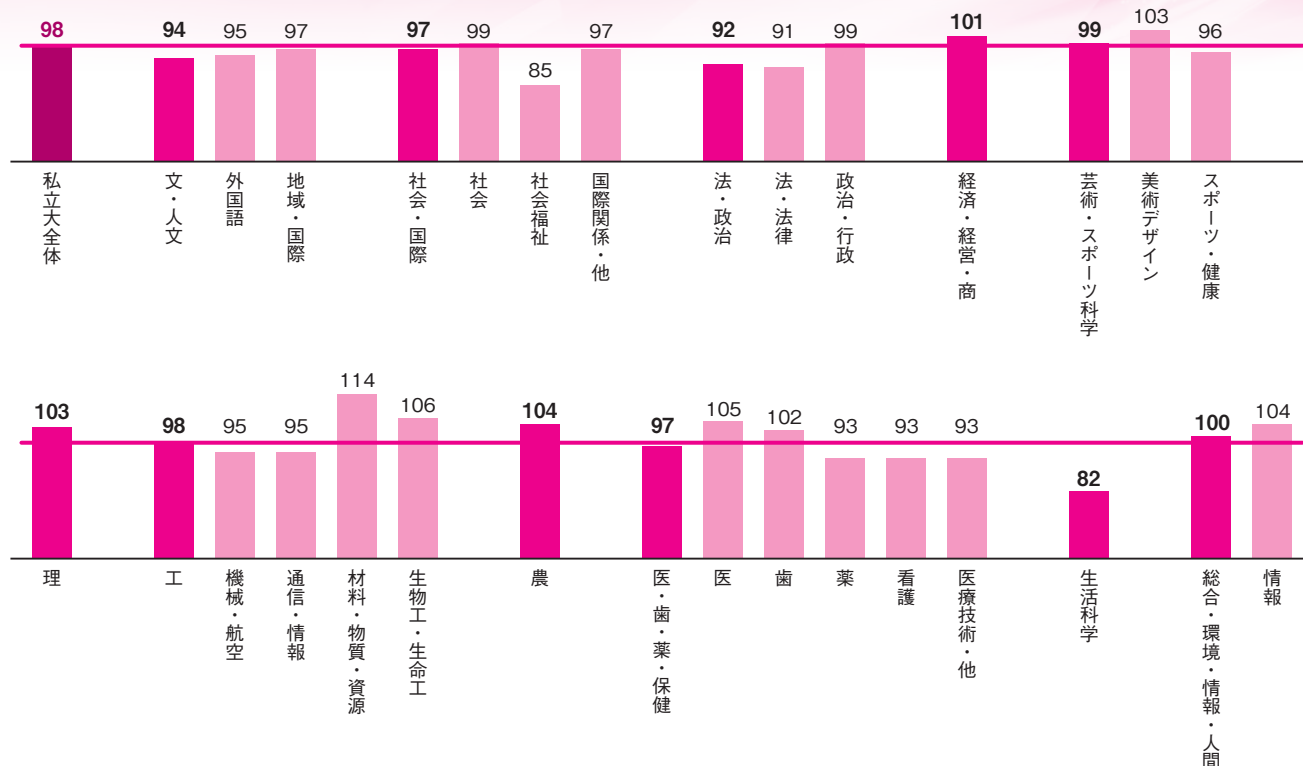
医療系では、「医」「歯」で志願者が増加した。一方、近年人気を集めていた「薬」では志願者が減少に転じたほか、「看護」「医療技術・他」でも減少しており、人気の低下がうかがえる。

「総合・環境・情報・人間」は前年比100%となった。近年、学部・学科の新設が相次ぐ「情報」の志願者は前年比104%と増加した。

主な私立大の志願状況

＜図表14＞はいずれも、3月10日までに志願者数が判明した入試方式の集計である。以下、首都圏と近畿圏の13大学の状況について確認する。

図表13 私立大 学部系統別志願状況



※グラフ中の数値は志願者前年比(%)、グラフ内の横線は、私立大全体の前年比98%のラインを示す
 ※3/10現在、河合塾集計(2023年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外)

青山学院大

大学全体の志願者数は、43,948人(前年比92%)と1割近く減少した。前年入試では志願者が大きく増加しており、その反動によるものとみる。学部別にみると、多くの学部で志願者が減少したなか、教育人間科学(前年比103%)、理工(同105%)、コミュニティ人間科学(同111%)の3学部は増加した。理工学部では今春入試より、個別学部日程B方式(共通テスト併用型)の共通テスト科目を英語のみにしていることもあり、同方式の志願者は前年比148%と大きく増加した。一方で、文、総合文化政策学部などでは志願者が2割以上減少した。今春は総合文化政策学部などの学部で共通テスト方式に新たな受験方式が追加された。総合文化政策学部の共通テスト方式では新たに4科目型、5科目型が設置されたが、既存の方式より必要科目数が多いこともあり、志願者はそれほど集まらなかった。

慶應義塾大

大学全体の志願者数は37,411人(前年比99%)と概ね前年並みの志願者を集めた。学部別にみると、7学部で志願者が減少しており、なかでも文(前年比97%)、総合政策(同95%)、環境情報(同94%)では志願者の

減少が続いている。環境情報学部は4年連続、文学部と総合政策学部は6年連続で志願者減となっている。一方で、理工(前年比103%)、医(同102%)、薬(同105%)の3学部は2年連続の志願者増となったほか、商学部では志願者数は減少したものの、英・数・地歴を課すA方式では前年比104%と増加した。

上智大

大学全体の志願者数は26,552人(前年比118%)と、「早慶上理」グループ内で唯一志願者が増加した。方式別にみると、共通テスト方式の志願者数は前年比124%と2割以上の増加となった。上智大ではこれまで「共通テスト利用方式」では4教科型のみを実施していたが、今春より新たに3教科型を設置した。既存の方式に比べ教科数が少ないこともあり、3教科型に多くの志願者が集まった。志願状況を見ると、従来の4教科型が募集人員87名に対し志願者数が4,049人(志願倍率46.5倍)、3教科型が募集人員66名に対し、志願者数が5,787人(同87.7倍)と差がついた。一方、一般方式にあたる「TEAPスコア利用方式」の志願者は前年比96%と減少した。

学部別の状況を見ると、志願者が増加した学部が目立つが、なかでも今春、入学定員を増員する理工学部では志

図表14 主要私立大 志願状況

大学名	一般方式				共通テスト方式				合計			
	21年度	22年度	23年度	23/22	21年度	22年度	23年度	23/22	21年度	22年度	23年度	23/22
北星学園	1,797	1,821	1,415	78%	837	876	533	61%	2,634	2,697	1,948	72%
北海学園	4,427	4,711	4,286	91%	1,968	2,246	2,068	92%	6,395	6,957	6,354	91%
東北学院	6,144	8,910	9,116	102%	3,747	4,100	3,611	88%	9,891	13,010	12,727	98%
千葉工業	54,459	58,144	62,084	107%	54,248	80,930	83,039	103%	108,707	139,074	145,123	104%
青山学院	20,056	24,614	21,850	89%	20,067	23,225	22,098	95%	40,123	47,839	43,948	92%
学習院	13,675	13,800	14,637	106%	3,433	2,821	3,457	123%	17,108	16,621	18,094	109%
学習院女子	1,709	1,143	1,425	125%	—	—	—	—	1,709	1,143	1,425	125%
北里	8,418	9,009	8,916	99%	2,775	2,787	2,847	102%	11,193	11,796	11,763	100%
共立女子	4,566	3,716	3,652	98%	1,128	766	1,116	146%	5,694	4,482	4,768	106%
慶應義塾	36,681	37,894	37,411	99%	—	—	—	—	36,681	37,894	37,411	99%
工学院	12,253	12,275	11,188	91%	6,506	8,827	9,075	103%	18,759	21,102	20,263	96%
國學院	13,273	14,868	15,390	104%	6,072	6,665	5,011	75%	19,345	21,533	20,401	95%
国際基督教	1,144	1,030	927	90%	—	—	—	—	1,144	1,030	927	90%
国士舘	9,051	8,192	7,202	88%	3,873	4,927	2,991	61%	12,924	13,119	10,193	78%
駒澤	18,752	19,515	19,526	100%	11,150	9,686	11,177	115%	29,902	29,201	30,703	105%
実践女子	2,482	1,916	1,912	100%	1,730	1,067	1,310	123%	4,212	2,983	3,222	108%
芝浦工業	21,393	22,182	21,600	97%	16,678	15,684	15,084	96%	38,071	37,866	36,684	97%
上智	5,412	5,123	4,915	96%	20,858	17,380	21,637	124%	26,270	22,503	26,552	118%
昭和女子	6,831	6,834	6,064	89%	3,205	2,774	3,826	138%	10,036	9,608	9,890	103%
成蹊	11,320	12,706	11,533	91%	7,321	6,769	6,902	102%	18,641	19,475	18,435	95%
成城	8,509	8,438	8,877	105%	5,164	7,258	5,331	73%	13,673	15,696	14,208	91%
専修	29,876	30,843	29,439	95%	17,102	15,311	15,084	99%	46,978	46,154	44,523	96%
中央	45,247	44,842	47,577	106%	32,110	18,513	19,180	104%	77,357	63,355	66,757	105%
津田塾	1,811	1,735	1,575	91%	2,052	2,245	2,153	96%	3,863	3,980	3,728	94%
東京工科	9,231	8,959	8,950	100%	4,179	4,073	4,038	99%	13,410	13,032	12,988	100%
東京女子	3,952	5,098	4,109	81%	3,248	3,744	3,247	87%	7,200	8,842	7,356	83%
東京電機	19,001	19,319	24,586	127%	9,382	8,196	7,835	96%	28,383	27,515	32,421	118%
東京都市	13,799	14,305	15,040	105%	13,225	8,881	9,507	107%	27,024	23,186	24,547	106%
東京農業	14,973	14,349	14,373	100%	7,214	7,545	7,050	93%	22,187	21,894	21,423	98%
東京理科	33,468	35,449	34,277	97%	15,833	18,303	16,035	88%	49,301	53,752	50,312	94%
東洋	56,929	54,083	51,071	94%	32,572	43,763	35,822	82%	89,501	97,846	86,893	89%
日本	73,821	72,931	74,047	102%	23,765	20,259	23,940	118%	97,586	93,190	97,987	105%
日本女子	5,892	6,248	5,783	93%	3,394	3,800	3,919	103%	9,286	10,048	9,702	97%
法政	65,756	79,537	68,961	87%	25,200	28,806	30,074	104%	90,956	108,343	99,035	91%
武蔵	10,773	12,722	12,055	95%	3,888	4,843	3,936	81%	14,661	17,565	15,991	91%
明治	71,551	76,328	80,258	105%	27,919	26,098	27,784	106%	99,470	102,426	108,042	105%
明治学院	14,324	14,400	15,197	106%	6,040	5,229	8,006	153%	20,364	19,629	23,203	118%
立教	44,099	40,146	34,642	86%	21,376	22,500	23,566	105%	65,475	62,646	58,208	93%
早稲田	74,820	79,047	74,545	94%	16,839	14,796	16,334	110%	91,659	93,843	90,879	97%
愛知	11,168	12,115	11,893	98%	5,341	5,656	5,317	94%	16,509	17,771	17,210	97%
中京	16,339	15,150	13,510	89%	11,564	11,960	10,760	90%	27,903	27,110	24,270	90%
南山	14,642	15,468	14,643	95%	7,249	7,976	7,605	95%	21,891	23,444	22,248	95%
名城	20,117	23,193	22,302	96%	15,710	16,303	16,417	101%	35,827	39,496	38,719	98%
京都産業	27,122	25,436	25,176	99%	13,803	12,299	13,099	107%	40,925	37,735	38,275	101%
同志社	36,490	37,726	40,157	106%	7,991	8,128	9,815	121%	44,481	45,854	49,972	109%
立命館	53,550	57,455	58,187	101%	29,962	30,880	33,195	107%	83,512	88,335	91,382	103%
龍谷	38,406	33,267	38,168	115%	14,538	18,925	18,330	97%	52,944	52,192	56,498	108%
関西	56,108	57,446	55,237	96%	22,437	19,987	21,093	106%	78,545	77,433	76,330	99%
近畿	98,285	115,595	113,126	98%	36,122	40,509	37,749	93%	134,407	156,104	150,875	97%
関西学院	22,585	25,768	28,723	111%	10,251	11,445	13,872	121%	32,836	37,213	42,595	114%
甲南	9,500	9,222	11,843	128%	5,231	5,380	4,718	88%	14,731	14,602	16,561	113%
広島修道	5,328	4,571	4,117	90%	3,925	3,449	2,999	87%	9,253	8,020	7,116	89%
松山	3,931	4,406	3,661	83%	1,987	1,727	1,455	84%	5,918	6,133	5,116	83%
西南学院	10,824	11,040	13,510	122%	6,238	6,138	5,658	92%	17,062	17,178	19,168	112%
福岡	28,880	29,034	27,912	96%	14,197	14,655	12,933	88%	43,077	43,689	40,845	93%

※数値は3/10現在、河合塾集計（2023年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

願者数が前年比132%と大きく増加した。次いで経済（前年比126%）、法学部（同121%）で高い増加率となった。

中央大

共通テスト後期を除く志願者数は前年比105%となった。前年入試では受験料について、一部方式の値上げや併願割引制度の縮小などで志願者数が大きく減少したが、今春入試では増加に転じた。方式別でも一般方式、共通テスト方式とも志願者は増加した。

学部別の志願者数をみると、総合政策（前年比119%）、商（同114%）、法学部（同109%）などで高い増加率となった。法学部は今春、多摩キャンパス（東京都八王子市）から23区内にある茗荷谷キャンパス（東京都文京区）へ移転する。交通アクセスの向上で人気を集めたとみる。多くの学部が志願者増となった一方で、国際経営（前年比89%）、国際情報（同92%）の2学部では志願者が減少した。

東京理科大

大学全体の志願者数は、50,312人（前年比94%）と減少した。方式別では、共通テスト方式で前年比88%と減少率の高さが目立った。

学部別の動向をみると、前年入試で唯一減少した先進工学部の志願者数が前年比152%と大きく増加した。前年入試の反動に加え、今春は2学科を新設したことが志願者の大幅な増加に繋がった。また、全国的には不人気の薬学部も前年比101%と前年並みを維持している。一方、理工学部から名称変更した創域理工学部の志願者数は前年比79%と大きく減少した。学科名称も変更しており、旧来の学科と結びつかなかったことも志願者減の一因とみる。また、入学定員が前年から2割近く減少した理学部では、志願者は前年比92%と減少したものの、受験生から極端に避けられた様子はなかった。

法政大

大学全体の志願者数は、99,035人（前年比91%）と青山学院大と同様、前年入試の反動により志願者数が減少した。方式別にみると、共通テスト方式では前年比104%と増加したものの、一般方式では同87%と大きく減少した。

学部別にみると、文（前年比102%）、社会（同110%）の2学部で志願者が増加した。社会学部では共通テスト方式で前年比198%と大幅に志願者を集めたが、これも前年入試の反動である。同方式の前年入試では志願者が大きく減少、一方で合格者数は増加したことから倍率（志願者÷合格者）は6.5倍から2.7倍へと大幅にダウンしており、受験生には挑戦しやすく映ったとみる。経営学部では今春入試より一般方式で英語外部試験利用入試を新規実施したが、既存の多くの方式で志願者が集まらなかったことで学部全体の志願者数は前年比92%となった。

明治大

大学全体の志願者数は、108,042人（前年比105%）となった。前年入試では志願者が増加していたが、増加幅が控えめだったこと、合格者数の増加で倍率はダウンしたことから、2年連続の志願者増になったものとみる。方式別でも、一般方式、共通テスト方式とも増加、前年比に大きな差はみられなかった。

学部別にみると、国際日本、理工学部を除く学部で志願者が増加した。経営学部の志願者数は前年比122%と2割以上増加しており、高い人気を示した。次いで、増加率が高い商学部（前年比114%）では4年ぶりの志願者増となった。一方で志願者が減少した国際日本学部（前年比93%）は、前年入試で志願者が増加した揺り戻しによるものとみる。

立教大

大学全体の志願者数は、58,208人（前年比93%）と2年連続で志願者が減少した。方式別でみると、一般方式では前年比86%と1割以上の減少となった一方で共通テスト方式の志願者数は前年比105%と増加した。

学部別にみると、経済、理学部を除き志願者は軒並み減少した。なかでも法学部では前年比55%と半数近くまで志願者が減少した。前年入試では志願者が約9千人集まり、過去10年で最大の志願者数となったことで受験生から敬遠されたとみる。新設のスポーツウエルネス学部は募集人員120名に対し、1,809人（志願倍率15.1倍）の志願者が集まった。

早稲田大

大学全体の志願者数は90,879人（前年比97%）とやや減少した。学部別にみると、教育（前年比91%）、国際教養（同89%）、商学部（同91%）では志願者数が1割近く減少した。教育学部では今春より新たに共通テストを課す方式（C方式・D方式）を導入し、既存の2方式と合わせて4方式での実施となった。しかし、一般方式（A・B方式）と共通テスト方式（C・D方式）は併願できないため、一般方式の志願者は減少した。前年入試で志願者数が大きく増加していたことも一因だろう。なお、新方式では志願者が募集人員の8倍を超えた場合に共通テストの成績で第1段階選抜を行うとしていたため、共通テストの志願者数も9百人程度にとどまった。国際教養学部は4年連続で志願者が減少しており、今春の志願者数は4年前の志願者数の半数以下にまで落ち込んでいる。一方、政治経済（前年比107%）、人間科学部（同111%）などでは志願者が増加した。政治経済学部では共通テストを必須化して初めての志願者増となったが、共通テスト導入前の2020年度入試以前の志願者数までには回復していない。

同志社大

大学全体の志願者数は49,972人（前年比109%）と前年に続き増加した。方式別にみると、一般方式（前年比106%）、共通テスト方式（同121%）と共通テスト方式で志願者が大きく増加した。

学部別にみると、文化情報（前年比157%）、スポーツ健康科学（同125%）、商学部（同125%）などで志願者が大きく増加した。文化情報学部は前年度で志願者が大きく減少しており、その反動とみられる。これらをはじめ、多くの学部で志願者が増加した一方、政策学部の志願者数は前年比84%と大きく減少した。政策学部は前年度も志願者が減少しており、不人気が続く。

立命館大

大学全体の志願者数は、91,382人（前年比103%）と増加した。方式別でみると、一般方式では前年比101%、共通テスト方式では同107%となった。

学部別にみると、産業社会学部では志願者数が前年比80%と大きく減少した。同学部では今春入試より共通

テスト方式の3教科型、併用3教科型で国語が必須となったこともあり、共通テスト方式の志願者数は前年比67%と大きく減少した。一方、今春入試で新たに共通テスト方式3教科型を設置した総合心理学部の志願者数は前年比115%と大きく増加となった。このほか、スポーツ健康科学（前年比130%）、生命科学（同123%）などで志願者の増加が目立った。

関西大

後期入試を除く大学全体の志願者数は、76,330人（前年比99%）となった。方式別でみると、共通テスト方式は前年比106%と増加したが、前年入試で1割近く減少したことによる反動がみられる。一般方式は前年比96%と減少した。

学部別にみると、総合情報（前年比115%）、社会（同109%）、化学生命工学部（同108%）などで志願者が増加した。一方、政策創造（前年比77%）、外国語学部（同85%）などで志願者が減少した。前年入試で4割近く志願者が増加した法学部では前年比98%と概ね前年並みを維持した。今春入試では共通テスト併用方式の日程を3日間拡充しており、受験機会が増えたことによって高い水準で志願者が推移したとみる。

関西学院大

共通テスト3月出願を除く大学全体の志願者数は、大学全体で42,595人（前年比114%）と大きく増加した。前年入試の志願者数は大きく増加していたが、それ以上に合格者数が増加、倍率（志願者÷合格者）は2.4倍までダウンしていた。方式別にみると、共通テスト方式で志願者の増加率が高くなっており、なかでも共通テスト併用方式で増加が目立った。とくに共通テスト併用日程（併用型・英語）では前年比165%と大きく増加した。同方式の前年入試は他の方式と比べ倍率が低く、学科によっては1倍台もしばしばみられており、受験生からは狙い目に映ったとみる。

学部別にみると、多くの学部で志願者が増加した。なかでも社会学部の志願者数は前年比142%と大きく増加、次いで総合政策（前年比138%）、経済学部（同134%）などで大きく志願者数が増加した。